

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十七年十月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三九九号）

## 次

親鸞聖人の真面目	近角常観	(1)
近角先生随聞記	柳瀬留治	(5)
本願力	井上善右エ門	(11)
凡骨日誌抄	西元宗助	(14)
わが母の記	田中克己	(16)
念仏詩抄	木村無相	(18)
大無量寿経に聞く	花田正夫	(21)

## 目

# 慈光

第三十四卷 第十号

# 親鸞聖人の真面目

近 角 常 観

近頃（大正十二年四月）親鸞聖人を題材とした色々な戯曲や小説等が多く出たが、何れも聖人の真面目を伝えていないように見える。世間に行われている著書は一般に聖人の伝記等に現われている人格、思想等を外部から眺めてその現われを強いて真似ればよいと考えているようである。譬えば、ここに水がある、これを私が飲んで非常に気が持がよいと云えば、それを呑んだ真の味が現われているが、これも本当に呑まないでいながら、唯呑んだ者の様子を外から眺め、その真似をして旨いと云っても、それは単に真似であって真の味とは云えない。世間の人が聖人を見るのはこれと同じである。

一例を云えば「親鸞は弟子一人も持たず候」と歎異抄にある。ここに聖人の如何にも謙遜なお姿が現われている。このお姿を眺めて、かくの如く謙遜にすることが信仰の故だと解している。すると吾々も謙遜にしなければならぬ

かもその外側を真似ようとしている点では同じものがある。例えば、親鸞聖人は家庭の宗教を開かれた方であるといひ、自ら煩惱具足、罪悪深重の凡夫といわれた方であると云つて、ここに聖人の信仰はただちに吾々の生活を肯定し、このままの人生を許容する煩惱肯定、絶対是認の宗教であると解し、随つて吾々が何等の規則もなしに、欲望の動くままに生活することが信仰生活であるなどと考えている者があつた。これもまた真に水を飲まずしてこの水は甘いという者のように、真に聖人の信仰を経験せずに、唯その言葉や伝記などの外部に現われたものばかりを眺めて、修養的なのは正反対になつていなければならない、どちらも同じく聖人の真面目を理解せず、皮相のみに踏み迷つていっている点で等しいのである。

## 二

然らば聖人の真面目は何処に存するか。先ず「親鸞は弟子一人も持たず候」とある。全体聖人ほど明かな弟子を多く持つていられた方は稀であるのに、弟子一人も持たずと何故言われたのであるかというに、これは世間では所謂謙遜などと外側からばかり見て片付けてしまふべきことではないのであつて、真実にわが力でこの人々に念仏申させたいのではないから、どうしても自然に弟子などと呼ばれないのである。今ここに信仰に入ろうとしている人がある。

のだ、又は謙遜にすればよいのだと考えてくる。現に一灯園などの生活が、つとめて他人の下に出ようと、所謂、「下座行」ということをする。然しかくするのが信仰である。と、力をいれて勉めるのであつては、それは聖人の所謂謙遜というような態度を外側から眺めて真似をするにすぎないのであつて、そんな処に聖人の信味があるのではない。もとより世間一般に奢侈に流れ怠惰におちいつている時に、自分の身を質素にし、他人に親切を尽して働くなどということはいかにも殊勝のことのようである、然し自分はこうして社会奉仕をしたのであるとか、又は懺悔の生活をしているのであるとか、そういうように云いふらすならば、それはすでに真実の奉仕からも、懺悔からもはなれてしまつているのであつて、かかる処には真実の信仰は働いていないのである。これらはみな信仰から現われる外側の姿を真似て、ここに力をいれて顛倒しているのである。

又一方にはかかる傾向とは行きかたを異にして、し

その人を信仰に入れようとして私がいくら努力をしても、私の力でその人を信仰に入れ得ることはどうしても出来ない。現にこの人こそは必ず信心を獲られるべき方だと思つて一生懸命に話してみてもどうしても感じない人もあつた。そうかと思つと、信仰に入りそうもない人が、案外に一寸した機会に入ることもある。この消息は「ひとえに弥陀の御催しにて念仏申され候」ということであり「わがはからいにて人に念仏申させ候」ことの不可能を語つているのである。故に自然と「親鸞弟子一人も持たず候」となつてくるのである。その信仰をいただかずして、その外観のみ真似ても致方はないのである。

親鸞聖人は真仏弟子ということを言われる。信仰を獲た者は真に熱い火に触れたので、触れもせずには火は熱いと騒いでいる者とは異なるのである。火に触れて自ら感じたところに真と云う言葉を用いられるのである。全体聖人のお言葉を押読すると、御自身の初めて思いつかれて言ひ出された箇所は少く、古来からの聖人のお慕いになる方々の言われた御言葉をそのまゝ繰返して用いられた所が多くある。然しそれ等は何れも単なる繰返しや模倣ではなくて、皆到る処に聖人御自身の独創的な生命が現われている。それは聖人自らが真実の信仰に生きられ、真に熱い火に触れられたから、自然にそうならざるを得なかつたのである。

世間的には自分の實際もつていと思われれる価値以下に自分を置くのを謙遜と云つてゐる。然るに聖人にあるは、實際自分の方は絶対的に無価値なものである。父母孝養も出来ないのである、弟子一人も持たれないのである。わがはからいで人に念仏を申させることも出来ないのである。仏の慈悲は唯仏のみより賜あるところであつて、聖人が御自分でどうすることも出来ないものなのである。故に仏恩を知るといふのも、仏の御力に催され、仏の自然のことわりになつて、おのずから知らされることなのである。他からして是非とも仏の慈悲をよろこばねばならないとか、有難がれとか、計い強いることではない。

眞実なものは仏の慈悲のみである。身体の冷い者が火に触れて熱いと感じる如く、私共が慈悲に触れて念仏申すのである、罪深い者は仏の恵みによりてのみ救われるのである。然るに現今流行の聖人伝にはこの点が欠けているものが多い。唯その外面のみを眺めて物真似をしているのが多い。そして信仰をさえ自ら実験せずして、他から借りておるものが多い。これでは聖人の真面目は見られない。

### 三

然らば仏の恵みとか、慈悲とかいふものは何であるか、恵みとか慈悲とかいふ言葉は常に聞きなれてゐるが、それをはつきりと頂くことはむづかしい。或は仏とは何ぞやと

志の顕現である、絶対の人格である。その故に仏には本願と云うことがある。本願とは吾々の欠陥を見抜いて同情し哀愍し、必ずこれを救わずばやまずとお誓い下され、お働き下さるのである。この本願がなくしては仏ではないのである。この仏の根本的生命である本願をかえりみず、其他の色々の性質を哲学的に考えたり、芸術的に見たりしてみても、これでは信仰を離れている。勅語が陛下の思召をあらわすごとく、救うという本願は仏の慈悲心の顕現である。吾々の心の奥を見とらして同情して下さるその本願に触れなくては不徹底に終わるのである。

元來仏とは他の言葉では現わされないものである。実在といつても、本体と云つても、現実生活といつても、それらはすべて仏という言葉であらわされるものとは別者である。或人がかつて信心の人に向つて「仏とはどんな方ですか」と問うた。その人の答は、唯仏の慈悲をのべ、念仏申すのみである。問うた人は、それでは説明にはならない。仏の何者であるかを説明するには、仏というより他の言葉を以てせねばならないか、と云つて腹を立てた。この人後に信を獲てから当時の事をかえりみて、自己の無慚無恥を知りわびたということである。

仏は他から説明されるべきものではなくて、体験されるべきである。而してその体験とは、その本願を、その慈悲

哲学的に考えて、宇宙の本体であるとか、実在であるとか答え、そしてその本体又は実在の現われが即ちこの現実の世界、この日常生活であるからといって、山川草木はことごとく慈悲の現われである、かくの如き慈悲を有難く感謝して生活するのが信仰生活であるなどという者がある。然しこれはすべて自分の頭の中で理智的に作りあげた仏であり、自分の胸に強いて有難く感謝すべきものだと思ひあげた慈悲であるから、自分の生活が順調に行つてゐる間はそれでよいようであるが、生活上に一度つまづきが生ずると忽ちに崩されてしまうのである。然るに眞実の慈悲にめぐめられた者にあつてはかくの如き如何なる動揺にあつても崩されはしない。

子を失つて物足らなく感じてゐる人がある。側からこれを丁寧な慰めてあきらめよと云つても親の心は満たされぬ。たま／＼同じ経験をした人が来て、その人の心を察し共に悲しみを語り合う時に、その人の心は慰められて軽くなるのである。仏の慈悲とは無限の同情である。絶対に心の奥を見抜かれて、汝はいかにも物足りないであらう、その物足りないさを我は案するぞと呼んで下さるのである。この絶対的慈悲の実現が仏なのである。

仏は決して所謂実在とか本体とか、勿論また現実の生活そのものとかいふものではなくして、唯いわば偉大なる意

を、その無限の同情そのものを実感することにはかならないのである。要するに、仏の慈悲に触れることが根本の問題なのである。然らざれば親鸞聖人の生涯は到底理解されないのである。この理解なしに、唯単なる伝記を見て、外側からその様子をえがいたり、真似たりしても、ついに聖人の真面目は得る由もないのである。

大正十二年『法藏』誌より

### 近角常音先生の讃仰歌

よしあしは人にはあらん大悪の阿闍世われにはよしあしはなし

このころころこれを阿闍世とのたまひて見捨てずというみ慈悲なりしか

常観言

常音記

またやりそこない／＼それだからお呆れないお慈悲でな

## 近角先生随聞記

歲月の流れるのは夢のようである。先生を思うにつけ、御生前講話の上で常々繰返して申された幾つかのお言葉がありありと浮んで来るのである。常観先生は大砲なら、御弟の常音先生は機関銃を以て我々の自我我情の城を破って下さるのであった。両先生のお言葉は一一信仰の体験を通じてのお言葉で、御自身が人生苦悩の極に、仏の大悲に救われなされた喜びのほとばしり出たもので、言々言葉というより力のほとばしりであった。救われるとは力に引き揚げられるのだということをつくづく感じるのである。

両先生のお言葉は誠に御自身の救われた仏の大願業力そのものが口を突いて表われたもので、そのお力に我々の我執の骨子が打破られて先生のお言葉に順い、多くの方が入信された様子である。

我々は一度、安心させて戴き喜んで、しばし元に戻り、今日はここを伺おうと思つて参つて、先生の喜びに溢れるお顔に接すると、困っていた自己の迷妄が忽ち消え去

というより信力が語気語勢をもって我々の心にじかにとび込もうとするものだった。従つて言葉も先生の体験から出る独自の言葉が多く、その著しいものは、どこまでも五分五分の止まず苦しんでいる私共を、飽迄五分五分を離れた広大な御心で可愛想に思つて下される。その五分五分と可愛想のお言葉は一席のお話に必ず繰返されるのである。

「我々誰しも五分五分の心を持っていて人生上それに苦しむ。善いものは愛され悪いものは人に嫌われあきれられる。私は学生の頃、朝道で先生に礼をし、先生がそれに応じて礼をしてくれないと何か私のことを悪く思っているのではないかと心を廻した。先生に聞くとなんかことがあつたかなあとの話をされることがあつた。又電車で持つ吊革がなく吊革を譲つて貰うと、その人は「つしか持つていぬのを譲つたことが判り、誠に失礼しましたという」と、いや人生はあいみだがいです。といわれ、そうした五分五分の私が五分五分ならざる人にあることがある。私共は少しでもよいことができたなら、喜べたら、念仏が稱えられたら、と思つて、仏の大きな慈悲の前にはたとえばロソクの灯も電灯も太陽の光の前には役にたたぬと同じで、小さな光を頼りにしているものを憐れみ給う仏のみ心の前には、暗くて困ると嘆いていたものも、明るさを誇つていた電灯も、全く何の役にもたたない。のみならずそうした我々をあきれ

## 柳 瀬 留 治

つて、取り立ててお聞きすることが要らなくなり、雲が吹き払われた空の様に何の障りもなく広大な光の満ちみちた心になって帰つたものである。

先生にお目にかかる時、お心からじかに電波の様に伝わつて来る「君達のもや／＼した心は百も承知の上の広大な慈悲だ」といった慈しみの笑顔に、私共の小さな霜柱がめら／＼と消えるのである。先生のお言葉は言葉というより力をじかに突きつけられるもので、廻りくどい説明でなく、火とはこれだと火を突きつけたら皆さんは熱いというであろう。仏はその火である。如何なるものも焼き尽くす火である。俺は鉄だと威張ついても焼き融かさずは止まない。私の如き煩惱強情の心も参りましたと胃を脱いで謝る外はないと仰言つた。その短刀直入なお話は先生の心の火を直ぐさまおつけられた気がするのである。

常観先生の晩年は病気で体が弱られ語気も低くなられたが、四十代から五十代の頃は情熱の籠つた御講話で、言葉

給わぬお慈悲である」との言葉、私など永い間信するから救われる様に思い、喜べるのがよくて、喜べぬのが悪い、と思ひ、救われるには、救われるだけの資格がなくてはなるまいと、五分五分の考えから離れられずにいた。

又常音先生からは「救われる値打など永劫に出ない。それをやがて出るものかの様に思っている、まだ駄目ですと払いのけている。それで永劫に流転するのだ」といわれ、漸く判つたのである。

我々は飽迄五分五分の考えがこびり付いているために、唯の念仏だといわれる「唯」が判らず、かく喜べぬものだから、かく黒闇のものだから、浅ましい心の止まないものだから、憐れで見捨てられぬ、という桁はずれなお慈悲が判らなかつたのである。超世の本願といわれるが本当にこんな桁はずれのことには世にあると思つていながかつた。誠に不思議という他ないと思う。

又常観先生は「この駄目なものを仕様のないものを、可愛想に思い、憐れに思いどこどこまでもお見捨て給わぬのだ、親は満足な子供より片輪の子、出来の悪い子、道楽な子は、よけいに捨てて置けぬ」と声をからして仰言る。そしてよく、偃偻の子を持つた母親の入信を語られた。

或る日、偃偻の子供が戸口に出て、小学生の遠足を見ていた。生徒たちは口々にあれあの偃偻の子よと指して通つ

た。子供はわっと泣き出した。それを見た親は思わずとび出て「この子だつて生れ付きの片輪ではありませんよ、なりたくてなつたのではありません。人の子供の悪口は云つて貰いますまい」と、その子を掻き抱き千万無量の思いで家の中へ入つた。爾来その母親はそのことが寝ても覚めても心の悩みとなり、仕て見ようがありませんと訴えた。

先生は、その仕て見ようのない子供、そのあなた、そして宿業を持つて悩み苦しむあなたの仕て見ようのない心底を汲みとり、現にかく仏が憐れに思し召して唱えよとのこの念仏ではないか。と申されるや、その母は「仏とはそうした方でありましたか」と喜ばれた。

この話は何十回と申されたお話であつた。先生はまたよく出獄人の話をされた。「善人をおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。親の心からすると、出来のよい子も可愛いが、出来の悪い子はよけい心配でたまらない。刑期終るや、出所即刻、親の許に帰つて来いと、親が云うのであるが、子は少し面目が立つ様になつたら、手土産が出来たら、成功したら帰りましようといつて、帰らない。親は、手土産だの成功だのそれこそ、お前には泥棒でもしてする外ないであろう。碌なこと出来るお前ではない。汚名のまま直ぐ帰つておいで。心配でたまらないと親は待つてゐる。親心はこれである」と説かれた。

「高野の明遍僧が夢の中で、天王寺の山門前で、多くの乞食や病人に粥を煮て食べさせている一人の僧がある。それを見た明遍僧は、何と不思議な尊い僧であろう。あの僧は誰れか、とかたわらの人に尋ねたところ、『あれは吉水の法然聖人である』とこたえた。僧は夢ながら、かねて念仏一つを勧める法然聖人の教はかたよつてゐるとさげすんでいたが、如何にも重病人のかたい飯の喉を通らぬものにとつては、かくたやすくすらすらと喉を通る粥より外はない。かねて法然聖人が、唯念仏せよと言つていられる事は、いかにもそれであつたかと、感に打たれて夢がさめた。

誠にかたいものの喉を通らなくなつた我々は重病人である。それをあわれみ与え給うのが念仏の粥である。粥がつまらないで、仕様事なしに食べているが、それは無上甚深の功德を籠めて作つた粥である。まずいだろが食べてくれとの仏のお心である。何物も喉を通らぬ私に、何と深いお心ではないか」

と先生は涙ながら申されたことがあつた。

私がまだ若く、信仰が判らず迷つていた頃であつた。

日曜講話で常観先生が

「いつまでも、やがてそのうちにと、将来へ逃げてばか

誠は仏が我々の碌な事の出来ぬことを知り抜いて、唯の念仏だと仰せられるのに、喜べたら、信じられたら、仰せに従いましようと言つてゐるのである。誠に仏に對して五分五分でゐるのである。我々の喜びと申すと、救われたからの喜びで、功利に基づく感傷に過ぎず、直ぐ消えてしまふ喜びである。私共の救われる資格は罪惡深重、煩惱熾盛、それが可愛想で見捨てられぬとの大願業力一つだけである。我々碌な持物はないのみでなく、一つも役に立たぬもので泥棒の持金と大差はない。

又常観先生は「念仏とて仏からの貰い物で、碌なものを持たず空虚でして見様がないので下された物である。人生何物も腹を満たすものがなく、飢えに悩んでいる私に、唯この念仏だと与えて下された食べ物である。いわば仏を食べて生きてゐる私共である」とよく仰言つた。「われは蛇に生れつき、蛙を吞むより仕方のない人間でありながら、三尺の蛇が何とか二尺になろうと善を勤めたがる。蛙を吞む醜い蛇を憐れに思召して、お前が可愛想だ、わしが吞まれてやろうと現われて下されたのが仏だ、誠に仏を食べて生きてゐる我々なのである。ただ誇りとする所はお慈悲の辺際なき広大なこと一つである。」と、それにつけて更に思い出すことは、常観先生をよくなされたお粥のお話である。

り聞いていては駄目である。法を聞く時は、我身の現在で聞くべきである。今現在信じられず、有難く念仏の稱えられぬ者が、何時までたつても信じられ、有難い心の起る筈はない。やがてと将来へ逃げるのは心の迷いで、それで我々は眩劫より流転し来り、出離の縁がないのである」と仰言つたので驚いたことであつた。

「我が身の現在で聞け」の一言は、我々が自力を頼んで今にすこしは本気に聞けるようにならうか、いよ／＼どうにもならなくなつたらとか、仏の真実が少し判つたらとか云つて逃げる私に打たれた釘のように今も思われる。自分自身を持ち悩んでいる癖に「お前の力ではとても助かる道はない。仏の御力にまかせよ」と言われれば、今に何とかなりそうな妄念が出、我執が出て、任しきれず逃げるのである。

また我々が仏を信じようとしてゐる心、それが仏に随順しようとする心だと思つていたところ、先生は、

「それは仏の仰せを聞くのではなく、自分自身の思わくを仏に求めているのである。安心がしたいの、喜びたいの、有難く念仏が稱えたいのと、結局自分の欲念を満たし、自分が楽に、都合よくなりたいたいのでないか。自分の胸がこんなに空虚で仕様がありません。これを満して下さいと、胸にもつ欲念の空虚な袋に、何か有難いものを恵んで頂きた

いと云っているのである。

私はそれを、汝の生れつきの空虚さで底知れぬ貪欲である。その遂げられないのが可愛想だ。それに悩んでいるのが憐れで放っておけないとお慈悲であって、恰も我々が空虚な袋を開いて、これに有難いものを入れて下さいと求めている、その袋の底の外側から、それだから可愛想だと、袋を裏返しに入れて下さるのである。欲しいものが得られたのではなく、得られないので可愛想だのお慈悲が、思いもかけぬ、丸きり反対の方向から入って下さるのである」

と袋の譬をもって、袋の底から手を突込む仕草を以て、お話して下さるのであった。私が今迄、信仰心だと思ひ、お話を拝む心、それを菩提心とまでは思わぬけれども、殊勝な仏教心のように思っていたが、それは空虚な心を満たし、安らかな心になりたいという欲念の外なかつたのである。「かねて私は汝等にそうした心以外に何があるか、世において満たされず、ひもじくて困っている汝である。この念仏の粥を食べよ、との仰せなのである」と話された。

今まで信じられたら、喜べたら頂きましよう、資格が出来て念仏の粥が頂けるように思っていた事は大間違ひである。資格がないから下されるお粥である。これなくは万劫に食べられず、飢え死にする外のない私でした。資格が

ないから下される、何と不思議なお慈悲でしょうか。

常観先生はよく仰言ったことである。

「私は蛙を吞まねば生きられぬ蛇なんだ。蛙を吞むと人に憎まれて打ち殺されるのだ。この者に、これを食べて飢をしのげとの念仏のお粥は、仏の体だ。吾々は仏を食べて生きていくのだ」と仰言った。碌なことのない出来ぬ吾々である。稱える念仏だけが善行である筈がない訳である。仏の体を食べて生きていくのである。余り誇りになる事でもないと思うのである。

自分が浅間しいとか、悪いとか云うことは、何か手本になるもの、照らし出すものがないと判らぬのでないかと思うのである。今の若い世代の人達は、自分が身勝手だとか浅ましいとかいう罪悪感といったものを余り感じないようである。大体に人間も一つの生物で、生きる為には、己を省みるなどしては生きられない。それは弱者の劣等意識だ、喰うか喰われるかの烈しい現実生活だ。と云う風に、大体は生物学的な考えが元になっている様である。

でも真面目に生きようとしている人は、己を省み、自分の力のなき、欠陥、空虚さ、利己的なことを感じていられると思うのである。殊に信仰に縁の深い方は、生活上行き詰った時、一応抵抗をもって宗教に気がつくようである。誰でも本心に信仰が判らぬ間は抵抗を持つのは普通で

ある。求道会館のお話を聞きに見える方々でもそのようであった。先生のお話を正面から反発されぬまでも、心に素直に聞けず、先生に、又仏にも立てつく心が起る。それだけに逆に、歯向うものを悪いと思召さず、殊に哀れで可愛想で捨てられぬとの仰せに気付かれ、一入お喜びになる有様を見たことであった。『人生随想』より

柳瀬留治歌集「霜 髪」より

### 昭和二十一年

郷里のともがらに語ることありて

ゆめ惑ひまどはさるるなくこの大きき声を聞きて覚めよ  
我とも

御恵み我等の上に及ばぬは遮るものありとこそ思へ

国敗れ民の惑へるこの今を信ずる所ありて説かむとす

感激に我がいう心通じけむ老も若きも水うちしごと

故郷の村よ古き友よその子等よこの道に生きよ大ききこの道に

### 昭和二十二年

歳首頌

むだに経し昨年と思はねかへりみて己の誠おろそかにせし

術あらぬおのれおのれを揺り醒まし眼をあげて仰げ大御  
仏を

おのおのの闇にうちあう手をとどめ聞けよ雷なす畏こき  
御声

貴きは和ぞと諭しし既戸の聖の皇子のたふとときに泣け

風邪に籠るしどけなきわれ御仏の遺瀨なき声に熱き血の  
湧く

食まざれば飢ゆる身にあれ足を知らば心ししみじみと和  
ごむこの世ぞ

# 本願力

井上善右エ門

先師白井成允先生が昭和十四年、神戸の光徳寺会館で「念仏往生の道」という講話をされたときの速記があります。その中、本願力に関する部分を、今日の言葉に合うように私の筆で書き改めてみました。記述の誤りや、意を尽くさないところがあれば、それは全く私の責めでありませう。ただ私には思い出の深い尊い教えでありましたので、皆さんにも味っていただきたいと思ひ認め次第であります。

念仏申すとは、仏の本願力をお聞かせいたゞく事でありませう。それは仏の救いの力をこの身にいたゞく事に外なりません。

では本願力とは何かということですが、聞き慣れて素通りしていることがあるやもわかりませう。心して本願力の真実をよく／＼気づかせていたゞきませう。その本願力について、まず法蔵菩薩の五劫の思惟、永劫の修行ということをお忘れなばなりません。

の流れの上に生起し消滅するものであつて、その生命を流転せしめる力が業であります。従つて人間としての姿は消滅しても、業の働きは消えることなく流れ続けます。この永遠の業の流れを思うと、法蔵の五劫の思惟、永劫の修行ということが必ず味われてくるのです。

私どもの生命は真如法性という真実の故郷から、我執の業縁によつて迷の世界に流れ出で、三世にわたつて流れつづけているのです。そして真の故郷の何たるかを知らず、流転輪廻の迷の姿を現じています。真如法性の境界より智慧の眼を以て、この流転輪廻の姿をみそなわすと、如何にも憐れであり、捨ておき難い悲心が動くのであります。何故なら法性の真如海は自他一如の境界だからであります。

こゝに何としても迷の命を摂取して、真実界に救い上げずにはおかぬという悲願が起り、この迷える命と一緒に流れて下さるところに法蔵の本願がましますのです。

法蔵菩薩の本願が成就し、迷いの命を迎えとらんがため、永劫の修行の徳によつて建立された世界が浄土であります。これに対し私どもの世界は穢土である。私どもの現実は苦しみ悩みの世界であります。それは煩惱の上に成り立っている世界だからですが、自分の生活の有様を顧みると如何にも穢れた浅ましい状態であることが感じられます。この世界でほんとうに清まらうとすることは自分の力では出来

法蔵菩薩とは如何なる方か。これもよく問題になるのですが、法蔵菩薩は歴史的人物ではありません。といつて神話かといつと、断じて神話ではありません。法蔵の五劫の思惟、兆載永劫の修行は、私ども銘々の命の奥底に私どもと離れることなく、共に流れ働いておられるからであります。

あるいはこの事を、精神活動の底にやどる真理の働きといふことができるかも知れません。しかしそれは既に理性の反省になる言辭であつて、宗教的な生命の実際とは隔たるものであります。

さらに、法蔵の五劫思惟はわれわれの業の問題と離すことができません。私どもは今、業の嚴肅な果報として人間の姿をとつています。業というのは生命の流れをつかさどる作用の法則であります。われわれはたゞ目前の現象だけしか見ることが出来ません。その現象の上だけで生を考へ、死を考へているのですが、生命の現象はもつと／＼深い底

ない。これを如何にして救うことができるか。こゝに浄土建立の所以があります。

かゝる浄土は何処にあるのか。それはこの穢土に閉じこめられている我等の肉の眼では見ることが出来ませんが、しかし生死の流れとして業の造り出す世界と、真実の智慧から出て来る世界とが違ふものであるといふことは頷かれるところです。私どもの命の流れと業とを背負つて下さる真実者の御働きがあることを思うと、かゝる徳によつて作り出された真実界としての浄土があるといふことは有難いことではありませうか。

さてその浄土の莊嚴とはどういふことでありませう。本願力成就の浄土の莊嚴は、その一つ一つが私どもの迷いを救うために成就されているのであつて、莊嚴の中にわれらは抱かれて居るのです。莊嚴と飾りとは異なります。われわれの世界の飾りは粉飾ともいふべきものであり、立派に見せかけるためのものに過ぎませんが、莊嚴とは真実心が我等をつむ万徳の花となつてかゞやき出でた姿であります。莊嚴によつてわれらは仏心に通ひ仏心を仰ぐことができるのです。衆生の往生を全うした真理の輝く姿こそ莊嚴です。浄土の莊嚴がこの世に現われて親鸞聖人の教えとなつたと申してよろしいでありませう。

かゝる浄土の莊嚴が私どもを喚んで下さる御名が南無阿

弥陀仏です。南無阿弥陀仏は本願成就の阿弥陀仏の私どもに廻施して下さる智慧と慈悲との結晶です。この南無阿弥陀仏が私どもの中に入り満ちて下さるのが信心であり、念仏であります。「たゞ念仏して」とは親様の御心をそのままいたぐところに、おのずから現われる姿です。これまた本願力の与えたまうところであります。

南無阿弥陀仏の呼び声にひき連れられて、迷の不真面目な命の流れを、真実そのものになりきった世界へ引き入れて下さる。仏の御徳に抱かれ、仏の本願力に導かれて、お浄土へ参らせていただくのです。迷える私の命が浄土の命とならしめられるのであります。迷える私の命が浄土の命とならしめられるのであります。



この仏の正覚に拵め取られた命が、翻って穢土に還りあらわれて、この世の迷いを浄土の真実に引き入れる働きを現じたまう、そのような境界に遊ばしめられるのです。還相は穢土をつむ真実界の自然の活動であり、そのことごとくが本願力のこの私の上に果して下さる奇しき御働きののであります。

## 凡骨日誌抄

八月、お盆前後

毎年八月は、地方からのお招きで、お盆の前後を除きましては、殆んど暇なしでしたのに、この夏は珍しくも閑居がつづきました。お蔭さまで毎日、机の前に坐って、ご本が読めたり、ものが書けたり、まことにありがたいこと、楽しいことでありました。久々に自己と対面した想いがいたしました。

お盆の初日は家族ともども、暑い日ざかりを、西大谷にお詣りしました。さすが沢山の参詣人で宗務所のあたりも御本廟のあたりも賑わいました。ついで私共は、西大谷の墓地でも一番東の、鳥辺山の隅っこにある、わが家のささやかなお墓にお参りしました。家内が小バケツに汲んできた水を、ひしゃくですくうて、お墓の頭上から、すこしづつかけますと、正面に彫つてある帰命無量寿如来の文字が一層きわだつて浮き彫りにされます。わたしの書いた拙い

## 歌集「青蓮華」

白井成允

角坊（聖人終正馬の寺）

ものみなこのちの道を証しつづつ住みおほししかも此処にわが聖

おん糧もしばば絶ゆれわが聖 真実の道を此処に告りましし

とこしへに迷ひ苦しみ出期なきわれらが行方ここにあかしし

弥陀仏のひろき誓ひ告るとこそ三十年此処に御筆とら

恥おつべき愚禿と御身を告らしつつ無碍のみ光を証したまへり

世の艱み負ひしみのち此処に果て知る人まれに往かせたまひし

## 西元宗助

字なんですけど、石工さんがうまく彫ってくれたため、案内みことなのです。その帰命無量寿如来の御前に神妙にひさまづきました。

ここは、やがて私共の遺骨も納められるところ、山にかこまれた、寂かな、思いがけなくよいところなのです。

その私どものお墓から三十メートルのところ、いや、直線距離では十メートルもない一段高いところに、川畑愛義医学博士どのの欧風の美しいお墓があります。欧風といひますのは、外人墓地の墓碑のように横にながく、その表面にはサンスタリットの横文字で南無阿弥陀仏といういみの文字が刻まれているのです。これはたしか、今は加州サンタ・バーバラの宮地廓慧勧学の揮毫です。なおその裏をみると、

行きあたり つき当りせし 業縁の壁は見えずも 光寂けき 愛義



と、さすがにこの歌だけは、うつくしく縦書きに彫られていました。この歌は、川畑さんの御歌集「壁は見えずも」(京都上京区河原町今出川下ル出町書房刊・美本千四百円)の末尾に載せられているもので、すでに喜寿を迎えられた同兄の「光寂けき」心境をうかがうことが出来る。この歌集には右の歌と前後して、「称ふれば十方菩薩のおのに南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」のようないっそう有難い御歌もある。

なおここには先生の御母堂も寂かにねむっていられる筈。尤も御母堂は多分、ニシモトさん、わたしはこんなお墓の中にイマセンよ、お蔭さまで、仏さまにならせていただいていますので、ナンマンガと、四方十方、衆生済度のため飛び廻るのに忙しくて、とおっしゃることであろうと、そう思いながら、御墓前に合掌したことでありました。ともあれ、お墓まで隣りあわせ、川畑さんとは、よくよくの深いご縁で、ありがたいことであります。先生ご夫妻は私ども夫婦のお仲人さんでもおありなさる。

○  
八月も、もう終りに近いある日、重たい書籍小包郵便が届けられました。あけてみると井上善右エ門博士の「蓮如上人御一代記聞書讀解」(永田文昌堂刊・五千五百円)でありました。思わず、これは、よい本をお出しただけだと、

## わが母の記

父の眼の見えぬわが母ひとりうつむけり  
先日、テレビで歌舞伎を見ていて、ふと昔作ったこんな拙い歌を思い出しました。

昭和十八年の暮、陸軍司政官として南方へ行くことになった私は、出発命令が下るまでの間を、役所を離れて郷里で暮らすことになり、家族を連れて讃岐丸亀の生家へ帰って来ました。生家は小さな作り酒屋でしたが、長男の私が学校を出て役所勤めをしたものですから、商売の方は姉夫婦が後を継いで居り、もう七十に手の届くばかりの母も存命でいました。(父は私が学校を卒業するかせぬかの時に亡くなりました)

その郷里で過した二ヶ月位の間は私の生涯の中でも思えば深いものですが、これもそのひとつ。あるドサ廻りの女歌舞伎の一座が、町の古い劇場にかかっていたのでした。母は若い時から眼性が悪く、当時は殆んど

声でかかるといふほどに随喜いたしました。

わたしは学生時代、めぐまれて羽濑了諦先生の知四明寮(現在わたしの家の近くに、その建物が、殆んどそのままに残っています)に入れていただいていたのですが、その知四明寮で、毎朝の嘆仏偈の勤行のあと、羽濑先生が必ず一節づつ、朗々と読まれたのが、この「御一代記聞書」でありました。それも島地大等師の真宗聖典によってでありました。それはまことに感銘深いものでありましたが、そのときの寮生仲間が前記の川畑愛義・宮地廓慧の悪童たちでありました。そのようなよき想出がありますだけに、このご聖教はなつかしい。ところでこのご聖教は、やさしいようで案外むづかしいのです。

それだけに井上兄がこのたび、旧「自照」誌時代から、その廃刊後はさらに本誌に、殆んど毎月連載してこられ、足かけ八カ年にわたった蓮如上人御一代記聞書の「讀解」が、このたびまとめられて一巻の書物となったことは有難い。殊にこの書には、井上兄の篤厚なお人柄と学識とそのご信心がうかがわれて、まことにその人を得たとの感が深い。なおこの書の刊行を最も喜ばれるのが、今はお浄土の白井成允先生でありであろうとの思いの深いものがありました。四百ページの菊版の大著であります。篤志の方々

## 田中克己

失明していたのですが、元来芝居好きであったので、私は母を連れて、家内等とともに観に行きました。出し物のひとつに「白木屋お駒」とかいうのがあり、筋は憶えていませんが、派手な娘姿のお駒が、舞台上で愁歎をつくすところがあります。観客は皆眼を吸い取られたように舞台上に見とれていましたが、ふと隣りに坐った母を見ると、母だけじつと下を向いて、お駒の言葉だけを聴いているのでした。眼が見えないのだから当り前のことですが、私には舞台のお駒にも増して哀れでありました。

郷里に帰った始め二、三日こそ、話の種もありましたが、母と息子の間は、そのうち話すこともなくなってしまうました。それなのに、私が机に向って、何か読んだり書いたりしていると、母は黙って私の机の傍に来て坐りました。そして一時間でも、二時間でも黙ったままで坐っているのです。私が席を立つと、仕方なく後から立ち上るといふ王合。それが、やがて戦地に赴いて、帰って来ぬかも知れぬ

息子に対する、母の惜別の情の現われだったのでしよう。母と私の家内とは、たいへん仲が良かったのですが、いろいろ事情があつて、当時、住宅事情の極めて困難な中でしたが、私の家族は別居することになり、物置同然の家を見つけて引越した翌日、私に出発命令が下りました。昭和十九年の二月でした。

ジャカルタで終戦を迎え、翌昭和二十一年五月、幸い無事帰還、名古屋へ上陸しました。数日名古屋に滞在した後、郷里へ帰る車中から、私は家内に電報を打ちましたが、幸い家内の手にそれが届き（今ならあたりまえのことですが）その日の夜半の十二時過ぎ、駅頭で家内や娘に再会しました。家内の話では、電報を手にすると、直ぐに母のところへ馳けつきました。息をはずませて家内が「お母さん、吉報よ」と言うと、母は言下に「克己が帰るのかい」ときいて、そうだと知ると、畳の上に両手をついて「有難うございます」と言つて頭を下げたそうです。

その時、チョッピリ私の後悔の種は、帰還にあたって、金一千円也の手当と共に、小型の石鹼くらいの恩賜の羊かんを持ち帰りました。その羊かんは、四等分に切られて、私の四人の幼い娘どもの口に入りました。母の口には一片も入らなかったのです。

## 念仏詩抄

如来さま

あるひといわく  
“娑婆のいろ／＼のことが  
心につまっていますので  
とんと御化導（ごけどう）が  
通りませぬ——”

香師—香樹院徳龍師

香師おおせに  
“そのムネは我が力では  
はらわれぬ  
如来さまがはろうて  
お聞かせ下さるほどに——”

はろうて下さるも  
如来さま——  
お聞かせ下さるも

母は私の帰還の翌年、七十三歳で往生を遂げました。葬式が終つて骨上げの時、私は竹箬で母の遺骨を拾いながら思いました。あの時、羊かんを五等分に切つて、母にも一片喰べさせていたら、この骨の中には一PPMの何万分の1かの糖分があつたらうけれど（勿論当時はPPMなんて知りませんでした）喰べさせていないから、この骨は塩分ばかりだろうと。

数年前、私は年賀状にこんな歌を書きつけました。  
父に似るとばかり思ひしわが面の  
歳（よわい）とともに母に似て来る  
（昭和四十八年二月）

追記（花田記）

田中さんは私と六高同窓で、池山先生の歎異抄のお話など一緒にお聞きしていました。東大の法学部政治学科を卒業され、主に刑務所に勤務、戦中に南方に司政官として勤務され昭和二十年に帰還されました。特に御懇意になりましたのは、名古屋で中部成人保護委員会委員長として赴任して来られた頃からでした。その後公証人となられて新居浜市に転居され、五十年に定年退職され弁護士になられ本年の暮春に亡くなられました。謹んで一文を頂き、畏友を忍びお別れを惜しませて頂きました。

木村無相

如来さま——

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

今の念仏

香師おおせに  
“死にかかっている  
大病の子は  
我が身を案じもせず  
何とも思わねども  
その必死を知った親は  
その子をながめては

涙ながらに付き添いたもつ”

今の念仏下さるる

ナムアミダブツ  
親のわたしを案じの  
オコトバト

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

この上なき宝は

香師おおせに

宝は念仏にあり

現世に無量の徳を得て

後に浄土に生まるる因となる

功德この上なき宝は

南無阿弥陀仏なり——”

貞信尼いわく

”ああ 申しわけがない

うか／＼目ぐらししていて

お念仏をわすれているのは

小判(こばん)を道ばたに

まき散らして

ヒマな時にひらおうと

思うようなものじゃ”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

問題は——

香師おおせに

”わが身の地獄を

なんとも思わぬは

残念なり——”

問題は

信を得るより

量得ぬよりも

生死出離のネガイが

大切——”

後生大事にならないでは

骨の折りようスベも無し

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

××××××××××××××××

十五頁終りより続く

なお、この十月一日から、大阪駅前NHK文化センターで、ほとんど毎週金曜、歎異抄の講話をさせていただくことになりましたので御案内いたします。尤も前以って〇六一三四三二二八八に申込まれる必要がございません。

生死をはなれさせて  
下さるるほどに

おつる地獄のことでない

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

わが身の地獄

# 大無量寿経に聞く (一)

花田正夫

親鸞聖人が「真実の教を顕わさば、則ち『大無量寿経』  
是れなり」と讃えられ、釈尊が出世せられた本懐はこの経  
を説こうがためであったと随喜せられている。

ところが私共が繰返して拝読しても、あまりにも広大無  
辺なために茫洋として雲をつかむ様であった。そこで段々  
と心に銘じ、身にじんで味い始めたことどもを断片的に述  
べ、皆様の御示教をいただきたいと思つ。

## ナムアーン、猶し聚墨のごとし

法蔵菩薩が、師仏世自在王仏の御前に詣でられて、その  
不思議な徳光を讃えられ

光顔巍巍として威神極りなくまします

かくの如きの燄明ともに等しき者なし

日・月・摩尼珠光の燄耀も

皆ごとごとく隠蔽して、なおし聚墨のごとし

と。ここで私が心を打たれましたのは、菩薩が墨のあつ  
まりと同様であると自照されていることであつた。

この時、同時にひらめいたのは、華嚴経の入法界品にあ  
る善財童子求道物語に、童子が文殊菩薩の教えをうけ、そ  
こに表白された言葉である。

「迷を城とし、高慢を垣とし、六道をへめぐり、けがれ  
の愛を壘とす。

愚痴に覆われ、煩惱さかり、悪魔を君として、愚かの  
もの、内に住めり。

貪に縛られ、諂に正しき行を壊り、疑に智慧の眼を障  
え、愚痴に迷の輪をめぐらして、諸の国をめぐる。

圓かなる慈悲、清き智慧の日は、煩惱の海をつくす。  
願くばみそなわしたまえ。」

善財童子求道物語は、釈尊の求道の象徴であるが、文殊  
菩薩（絶対智の權化）の光照の下に、愚悪の身の自覚を得  
られ、そこに空手のなりの求道、五十三の善知識を訪ねて  
最後に西方浄土に往生して成仏されたのである。

更に、浄土の七高祖の上に眼を向けると、龍樹菩薩は、  
懦弱怯劣の身にかえられて、本願の船に乗じて、生死の海  
を超えられている。

天親菩薩は、はじめに小乗仏教に入り、大乘教を批判し  
ていられたが、兄君の無着菩薩に導かれて大乘の真意を知  
り、御自身の謗法の大罪を大懺悔されて、弥陀仏に帰し、  
浄土論を著わされたのである。

曇鸞大師は「吾既に凡夫にして智慧浅短なり。いまだ地  
位（菩薩の位）に入らず、ここに牛を引くの秣をもつて  
導く如く、念仏に手をひかれる外に救われる道は無い」と  
云われ、自ら西方弥陀一仏に帰し給うたのである。

道綽大師は四論を学んでいられたが悟りのひらけぬこと  
を悲しみ、曇鸞大師の碑文を仰がれて、「大徳さへ智慧浅  
短の凡夫と自照せられて、念仏門に帰していられる。余の  
如きは五鬢、牆に面するが如し」と智目行足無き身を慚愧  
せられて、浄土に帰していられる。

善導大師は「自身は現に罪悪生死の凡夫、眩劫よりこの  
かた常に沈み、常に流転して出離の縁あることなし」と深  
信されて、「一筋に稱名念仏せられたのである。

日本では小釈迦と讃えられた源信僧都は「顯密の教法は  
利智精進の人はいざ知らず、子が如き頑魯の者、あにあえ  
てせんや」と慚愧せられて、念仏の一門に依られたのであ

る。

法然聖人は「十悪の法然、愚痴の法然房」と名告られて  
専修念仏に帰し給うて、日本に浄土宗を立教開宗せられた  
のである。

わが親鸞聖人は「愚禿親鸞、内は愚にして外は賢なり」と  
と申されつつ、正信念仏の大道を歩まれたのである。

さて、親は子になくはならぬことのために昼夜に辛苦  
する。そこに親の真実の心が知らされる時、こうした愚か  
な自分のためであったと知らされる。このことは、近角先  
生がいつも繰返してお話し下さった、姥捨山の譬話、奥山  
に枝折り枝折るは誰がためぞ、親の身捨てて帰る子のため  
と、不孝な自分のための枝折りであったと、我身を慚愧せ  
しめられるのである。

弥陀仏の本願も、煩惱具足の凡夫の永劫に浮かぶ瀬のな  
いことをかねてしるしめされての御建立であったと知らさ  
れる時、地獄より外行き場のない自己の全体が照らし出さ  
れるのである。

鏡はものをよく写すが、鏡自身を写し得ないように、自  
分で自分を知ることが不可能であると、仏はお説き下さつ  
ている。唯弥陀大悲の本願の生起を聞く時、煩惱のかたま  
りの自分の全体が照らし出され、悪人が悪人でしたと頭が

さがるのである。

福島政雄先生は、大無量寿經の下巻の五惡の姿を説かれているところに、御自身を見出されて、斯の經の門が開けはじめたと仰言っている。私は、下巻の三毒段、食欲、瞋恚、愚痴に狂うて、無常にも気づかず、欲を追い、腹を立てて、修羅を続けているところに自分の姿を知らされ、弥陀仏の御苦勞は、かかる愚惡の私のためと仰がせて頂きはじめ、やがて四十八願も、そのころから頂くようになった。

第一の無三惡趣の願は、私自身が三毒の煩惱を撒き散らして、そのあと始末も出来ず、三惡道に沈むのを憐れまれるの悲願である。

第三の悉皆金色の願は、人間の皮膚の色で互にへだてるように、事毎に是非善惡の差別の心のやまぬにつけて建立された願である。

第四の無有好醜の願は、煩惱熾盛の我等は、愛憎違順して、悲嘆の涙のはてることがないのを憐れまれるためである。

第五の宿命通の願は、自分に都合のよい未来のみに心を走せて、宿業の自覚もない身の故と知らされる。

第六の天眼通の願は、柳は緑、花は紅と、物事をありのままに見ないで、身勝手な判断ばかりして、愚痴におち

ある。

第十七の諸仏稱揚の願は、本願のお名号を聞いても猫に小判で、弥陀仏の御心を知る力もない愚か者に、点滴が岩をも穿つように諸仏をはじめ、高僧知識、善友とあらわれて、その尊さをお知らせ下さるのである。

第十八の至心信樂の願は、四十八願の中心の願である。

遠い昔から煩惱の塊の身は虚仮不実の域にとどまって、仏の眞実至誠の心を知る力もなく、ましてそれを信じ喜ぶ心もなく、かかる浅間しき身を迎えようがために成就された浄土に生れようとも思わず、現世に執じて迷い苦しむ者することに憐れみ給うて、そのまことを注いで下さり、疑えない身に育てられて、仏のみ國に導き入れずばやまじとの本願である。それは、法を誘り、五逆の罪を犯さずには生きられない者を取りわけ悲愍して捨てじとのお誓いである。

第十九の修諸功德の願は、かかる大悲大願を聞き乍らも、そうは申されても、矢張りよくなつてこそと、相對五分五分の根性に障えられて素直に受領出来ぬ者、自力諸善に執着する者をお育て下さる方便の願である。

第二十の植諸徳本の願は、諸善万行の及び難いことを知って、大善大功德の念仏を稱えて、その力で浄土に生れようと願う、換言すれば、半自力半他力の域にとどまる者に、眞実信心の人におとらずしつかり念仏申しておれば、やが

る故と知らされる。

第七の天耳通の願をきくにつけ、私自身が耳順の年を過ぎて古稀も越えながら、見聞することに耳逆うことばかりの身を知らされる。

第八の他心通の願は、親子知らずで、まして他人の心は知る由もない身、言うことが相手の心を傷つけてやまぬ身を悲しまれたの願である。

ことに聖人の大切に仰がれた第十一の必至滅度の願は、近角先生が犯した罪のために囚人が一切の人々から呆れられる身をことに悲愍される親の心に気づくに譬えられた。そこに刑期の満ちるまでは親の膝元へ帰れないが、心はいつも親の懐に帰っていて、刑期の満ちるや否やただちに親の家に帰る喜びになぞらえられた。法華經には、長者窮児の譬喩で、親にそむき、親を忘れる窮児にそがれる親の念力で親の家に引き入れられる趣きを示されている。

第十二の光明無量の願は、煩惱具足の我等が、事毎に迷うのを見られて、何処で何をしようとも眼をはなされず、いつも見て下さる、心光照護の大智のお誓いである。

第十三の壽命無量の願は、いつまでたつてもさとりのひらけぬ、独り立ちの出来ぬ身をいつまでも護りぬいてやりたいとの悲願である。親は生れて間もなく大病して精薄となつた子のために、死んでも死にきれない悲心に燃えるので

て、どこどこまでもお呆れのない大悲のみ心にふれて、必ずこの願力一つに轉入せしめずはおかないとの深い思召しとこれを頂き、太陽が出ると提灯は無用となるように、自力は自然にすたるのである。ここにも仏語を聞きながらも、自力我慢のやまぬ身であつたと知らされるのである。

第二十二の還相廻向の願は、我々は自分ひとりか救い遂げられても、有縁の者が残らず救われる道が開かれぬと本當の安心は出来ない。かと云つて人間の親切心は、バケツの水がすぐ空になるように、末通らない。小慈小悲もない身故に、往生成仏の上から、仏と同じ大慈大悲心をもって有縁の者の救済をさせて下さるのである。

第三十三の女人成仏の願は、我々が男性だ女性だと互にごだわるのを悲しまれたの悲願である。

四十八願を一つ一つ掲げることにも紙数に限られて出来ないが、読者御自身に身読して下されば幸甚である。一一の願、衆生のため、と先覚者は讃えられている。以上のみ教え、本願を仰ぐ時、煩惱具足の身の、遠い昔から、また尽未来際かけて、それより外ありやうのない身を知らされ、「弥陀五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちうける身にありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と、祖聖の一語々々がわが身の上に渴仰されるのである。

# あとがき

今日、九月一日、関東大震災の日でありました。私の高校一年の夏、思出も鮮やかであります。東海地震もしきりに予告せられますにつけ、省みさせられることの多いことでもあります。

## ◎京都一道会御案内

とき 十月三十一日午後一時  
ところ 京都市西京区山田開町浄住寺  
池山先生は昭和十三年十一月に浄土に還られました。先生は御忌日に御遺骨をお護り下さる神原師の寺に自然に集つて、その御慈育を謝しながら互に語り合いました。遠ざかれば疎んじ、離れると忘れる世の常の鉄則を破つて、年々にお慕い申す人も増します。そのまゝが如来の廻光と存じます。  
今年もどうか皆様の御参集お待ち申します。

○  
近角先生の聖人讃仰の一文は、大正十年頃、『親鸞』の名のついた書物が沢山出版され、その御真意を取りそこなつたものも多いのを知られて、これを発表せられました。

近角先生の随聞記は、もう祖聖の御年に近くなつた柳瀬留治先生がかって発表せられたものであります。近角先生に直接お導きをうけられた人々も段々数少くなりました。今日、師の信徳に直接浴し得る貴重なものであります。

本願力は、白井先生の「念仏往生の道」の題でお話し下つた御心を井上様が御紹介下さつたものであります。御礼の言葉もありませぬ。

西元様は珍らしくお盆に御寸暇を得られての御執筆を頂きました。その中にありますように、井上様永年続いて讃仰して下さつた、『御一代聞書讃仰』の著書を御紹介下さいました。有縁の方々のおかれる書として御勧め申します。

田中克己様は私と高校同期の友で、池山先

生のお話を同聴した信友でありましたが、一般胃癌で亡くなられましたにつき、かつての御遺稿を頂きました。広島で刑務所長時代に「仏の所長」と慕われた人でした、足利浄円師に私淑せられ、甲斐和里子女史をも慕われました。

定価 半年 八〇〇円（送共）  
一年 一六〇〇円（送共）

一 年 一六〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫

電話 八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町 二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋(二四七)番

郵便番号 四五七

振替口座 名古屋(二四七)番  
郵便番号 四五七